

# 自由な生き方を可能にする努力 お受験からリスクマネジメントまで

石 井 至

子どもの安全とリスク・コミュニケーション研究班委嘱研究員  
石井兄弟社・代表取締役

## はじめに

本稿のテーマは、第 199 回産業セミナーを聞きに来ていただいた方々の関心事と重なるように、お子さんというよりもお孫さんの教育についてである。私は、ちょうどお聞きいただいた方々のお子さん方の世代より少し上ぐらいだろう。昭和 40 年生まれで 47 歳である。子供が 3 人いる。一浪して遊んでばかりいてどうなることかと思ったが、上の子は今年の春、東大に入学した。下の 2 人はまだ高校生である。私自身がすごく悩んでるのは、実は下の 2 人の子供ではない。一番上の、東大に入った子供の将来がすごく心配である。

恐らく皆さんのお孫さんは幼稚園児、小学生、中学生かもしれない。私ももうちょっとしたおじいちゃんになると思うが、なったときにやはり何が一番心配かということ、孫がしっかり食べていけるか、生活していけるかということである。お金持ちになる必要はないが、ある程度は稼いでほしい。今の世の中を見ていると、とても安い月給でこき使われ過ぎて、それで、若い人もそれでいいと思っている人が多いようだ。健康で元気なうちはいいが、年をとってくとそんなには働けなくなる。病気をしたらどうなるのか？ とても心配である。まさに人生はリスクの固まりであると言えよう。

私は、若いときに外資系金融機関でデリバティブを扱うトレーダーとして勤務し、一定の蓄財をした。だから、今は不景気で大変ではあるが、そんなに目先のお金のことで悩まなくて済んではいる。それを見て、長男は私のように外資系の銀行や証券会社に入って、それでいわゆるファンドマネジャーなどの仕事をしてお金を稼げるのではないかと考えているようだ。しかし、それは私からするともう時代遅れだ。

外資系では肩書が日本の会社の係長とか課長ではなくて、マネジングダイレクターというのが一番上の肩書である。いわゆる執行役員であるが、その下にヴァイスプレジデントという副部長がいて、それからアソシエイトという見習いがある。その下がいわゆるヒラ社員である。私が外資系で働いていた頃は、同じ肩書でも給料がかなり違っていた。しかし今は外資系に勤

務する者もサラリーマン化し、タイトルで給料が決まる。だから私が勤務していた20年ぐらい前には、毎月の月給で500万円もらっている人は数多くいたが、今はもちろんそんな人はいない。月給もせいぜい多くて100万円から200万円ぐらいであろう。もっと少ない人がたくさんいるというのが現実である。だから、親が昔ある商売でちょっと小銭を稼いだから、同じことをしようなどと甘いことを考えているようだが、それだと全然うまくはいかない、と私は長男には言おうと思っている。

人生というのは本当に何が起こるかわからない。将来何が良いかということもわからない。だから、一番大事なのはやはり基本的な能力を高めておくことであろう。また、人間一人ですることには限りがあるから、人から好かれて助けてもらえるということが大事である。だから、人間関係を大事にすることや好感をもたれるように人柄をよくすることが大事なのではないかと思う。

## 1 大使館顧問という仕事

では、現在の私は何をしているのか。実は自分の仕事を説明するのは大変ではある。肩書で言うと、日本リスクマネジメント学会という学会の評議員を務めている。もちろん関西大学の経済・政治研究所の研究員を2012年の春から2年間務めている。ドミニカ共和国に行かれたことのある方はいらっしゃるだろうか。ルワンダはいらっしゃるだろうか。ドミニカというのはカリブの島国である。大きなカリブの大都会である。ハイチの地震をご記憶の方もいらっしゃると思うが、ハイチと同じ島である。大きなイスパニョーラ島という島があって、その西側がハイチで東側がドミニカ共和国である。メジャーリーガーのサミー・ソーサの出身地として有名である。その国の日本大使館の相談役を務めている。ルワンダの大使館の顧問も務めている。

よく聞かれるのは、どうしたら大使館の顧問になれるのかということである。実はこうすればになれるというものはない。私の場合はどうだったかをご説明しよう。今のドミニカの駐日大使はペドロ・ベルヘスさんという人である。多くの国で駐日大使のポジションというのは、政権が変わるときに大統領の選挙に協力したから御褒美で任命されるというのが典型であろう。今のベルヘス大使というのもそのパターンである。2012年新しく選挙で選ばれたダニーロ・メディナ大統領とも、その前のフェルナンデス大統領とも親しく、日本で言う芥川賞のような文学賞を受賞した作家である。ドミニカの文化人の親分のような人である。ベルヘス大使と私は仲がよく、2012年も観光視察でさっぽろ雪まつりに2人で行った。2011年は山形の温泉に一緒に行った。そのベルヘス大使に顧問に就任するようと言われて、任命状をいただいたわけだが、実はドミニカとの関係は、前任のホセ・ウレニャ大使との関係が最初だった。

それまでは私自身はドミニカとの関係は全くなかった。偶然の出会いである。私はアークヒルズクラブという森ビルが運営している東京にある社交クラブの会員である。主に上場企業の

オーナー会長が会員で、東京にある外国の大使館の大使も名誉会員であった。あるとき、そのパーティーで、ホセ・ウレニャさんというドミニカ大使が来ていた。偶然隣にいた御婦人がそのウレニャさんのことを気に入られて、大使の家に遊びに行こうと熱心にいろいろ話しかけておられた。何か1人で行くのは気が引けるという話らしくて、30秒ぐらい前に名刺交換した私を誘って、一緒に行きましょうということになったわけである。そこで世田谷に当時あった大使公邸と一緒にいったわけである。

その御婦人は大使とおつきあいはそのとき限りであったようだが、私と大使とは馬が合った。私は「金融村」の出身で銀行で働いていたが、そのウレニャさんもドミニカ共和国の銀行協会会長や銀行の頭取を務めていた人だった。前のフェルナンデス大統領が弁護士をしていたときに、お金を融資したことがあったらしく、大統領の選挙も応援した。それで御褒美で日本大使になった。大使も私も同じ業界出身だったのですごく仲よくなった。ウレニャさんに連れて行ってもらって、ドミニカへも何度も行った。ドミニカは野球が有名である。大リーグがシーズンオフになると、ドミニカ出身の選手はドミニカに戻ってウインターリーグという、地元のプロ野球のチームでプレーする。要はメジャーリーグがドミニカで見れるという話なのだが、そういうものを見に行ったりしてすごく仲よくしてもらった。

ただ、そのウレニャさんからは顧問に就任するようには頼まれなかったが、その次のベルヘス大使から頼まれて顧問になった。なぜ顧問が必要だったかと言うと、要はドミニカと言っても、多くの日本人にとってはどこにあるかもわからない国である。地図でどこですかと聞いても、言える人はまずいない。そのくらい日本とドミニカとの関係は、アメリカやフランス、中国などと違って薄い。ドミニカは、例えば日本の政府に働きかけをしようと思っても全くルートがない。それで、よく行われるのが議連というものを作る戦略である。日本ドミニカ友好議員連盟のことが、国会議員の先生方にメンバーになってもらって、それで陳情を行う。もともと自民党の議連はあったのだが、民主党政権になってからは自民党議連のパワーはほぼゼロになり、それで民主党議連を作ることになった。あるいは超党派の議連を作りたいという話を相談され、そこでアドバイザーに頼まれてなったというのが経緯である。

ルワンダはジェノサイドという大量虐殺、つまり100日間で100万人が内戦で殺されたということでも有名な国である。2012年1月に初めて行ったが、今はアフリカのスイスと言われるぐらい安全なところである。またスイスと言われるぐらいだから、涼しい。赤道の直下であるが、高地にあるから年中、春の気候である。最低気温15度、最高気温25度ぐらいで、気分がいい場所である。今はもう平和そのものだから、真夜中に空港に着いても危険な雰囲気すらしない、そういう場所である。

ルワンダも私は全く関係がなかった。20年前の話であるが、私が外資系で働いていたときの同僚の1人がシンガポールでヘッジファンドを始めることになり、出資するように依頼されて、それで出資した。このヘッジファンドの株主であるので、私は時々シンガポールに行く。シン

ガポール訪問時に、そのヘッジファンド関係の人物が駐シンガポールのルワンダ大使のポールと仲が良いから、一緒にポールのところに遊びに行こうと言われて、駐シンガポールのルワンダ大使館に行った。近代的なビルに入っていて立派であった。行くと、日本にもルワンダ大使館があると言う。私はルワンダ大使館がどこにあるか知らなかったが、ポールが言うには、そこにアントワンという大使がいるから、アントワンのところに行って、何かあったら相談に乗るようにと言われた。ポールの友達だと言えば大丈夫だと言われたわけである。

日本に帰った後に、もうその時には既にドミニカの顧問になっていたから、いろいろな外交のイベントに大使とか大使館員の人と一緒に参加していた。例えば、広島原爆の慰霊式典というのは毎年各国の大使が招待されて行くので、私も、大使が留守だった時に臨時代理大使と一緒に広島に行った。そのときにルワンダ大使のアントワンを見つけて、「アントワン、私はポールの友達だよ。大使館に遊びに行きたいんだけども行っていいか？」と言うと、「いいよ。来てくれ。メールしてくれ」と言う。それでメールすると、返事が来ない。ほかの機会のときに、シリアのナショナルデーのパーティーで、またアントワンを見つけて、「アントワン、覚えているか」と言う、「ああ、しばらくだったな」と言うが、全然覚えていなかった。それで、「シンガポールのポールの友達だ。大使館に行ってもいいか」と言う、「来てくれ。メール送ってくれ」と言われて、またメールを送るのだが、返事が来ない。そういうことを4、5回ぐらいやって、5回目か6回目ぐらいになったらようやく返事が来て、大使館に行った。行くと、どうして返事が来たかということがよくわかった。

どうして会う気になったかという、JICA国際協力機構の理事長を務めていた緒方貞子さんという人をご存知だと思うが、その緒方貞子さんが国連の難民高等弁務官を務めていたときに、ルワンダもジェノサイドで難民がいたから、ルワンダによく行っていた。だから、ルワンダの人というのは、日本に関しては何かあると緒方さんのところに行けばよかったのだ。緒方さんはもちろんルワンダが大好きだから、直接すぐ会ってくれて、「ああ、わかった、わかった」と色々なことをしてくれていたであろう。ところが、その緒方さんがやめるという話が出てきたので、それで慌てたというのが実情であった。つまり、今までルワンダは何か困ったら緒方さんに言えば陳情できていた。ところが、もう緒方さんがやめるという話になったら、陳情ルートがなくなる。それで私がアントワンに呼ばれたのであった。「君はルワンダの大使館にどういうことができるんだ」と聞くから、逆に「何をしてほしいんだ」と聞いた。すると「緒方貞子さんがJICAの理事長をやめるから日本政府とのパイプがなくなる。だから、何かパイプを作って下さい」と言うので、それでは議連を作ってはどうだろうと提案した。こうしてルワンダ議連をつくることになった。平野博文さんという枚方の選挙区の議員に議連の会長をお願いした。平野先生は実力もあり、人柄もよい人である。平野先生に会長をお願いして、幹事長には現在自民党の国際局長を務めている遠藤利明さんという山形の先生をお願いして、議連をつくった。ルワンダは基本的にはODAの陳情を行う。ルワンダは海に面していないので、輸出

入で必ず他国の港を使い、他国の道路を使って国内に運ばなくては行けない。だから、道路が大事なのだが、道路がかなり傷んでる。舗装道路の修繕は、英語で言うと道路のリハビリテーションと言う。そのリハビリテーションを日本に担当してほしいというようなことを言われた。そういうことを議連を通じて陳情するわけである。

このように、ドミニカもルワンダも特に、もともと縁がなく、降って湧いたように話が来たのであるが、好奇心をもったので引き受けた。

ルワンダは、大使のアントワンが急に本国に帰った。現在、来ている大使というのはチャールズ・ムリガンデさんで、前文部大臣、元外務大臣という大物である。このチャールズとも親しくさせてもらっている。

## 2 大使館顧問以外の仕事

外国大使館の顧問のほかにも、東京都市大学の小学校の学校評議員を務めている。東京都市大はよく都立大学と間違われる、昔の武蔵工大である。旧武蔵工大と旧東横学園という女子大が合併してできた東京都市大学という大学が東京にあり、東急電鉄が事実上のオーナーである。その小学校の学校評議員を務めている。

他には、CAPDIというのは国際的な政治団体セントリスト・アジア・パシフィック・デモクラティック・インターナショナルの日本担当を務めている。セントリストというのは中道という意味である。産業セミナーの前の週までアゼルバイジャンに行っていた。アゼルバイジャンも多分行ったことのある方はいないと思うが、カスピ海という世界で一番大きい湖の西岸にある国である。このとき行ったのが2回目であった。アゼルバイジャンは驚くほど景気がいいが、石油のおかげである。東京の世田谷に大使館があるが、大使館員の服装を見て驚いた。上から下までブランド物である。すごく金回りがよいのだな、という印象である。

アゼルバイジャンの現在の大使は上智大学出身で日本語が流暢な人であるが、次席のハミドという人物が私の友人で、何かにつけていろいろな話を持ってきてくれる。私の会社は、旅行ガイドの出版もしていて、旅行ガイドに載せてほしいというふうに頼まれたので2011年に行った。行ってみると、観光省の車と役人と運転手が空港まで迎えに来てくれていた。石油の国なので原油浴というものがある。原油つまりクルードオイルをお風呂の浴槽にためて、そこに浸かるという治療法である。クルードオイルセラピー、原油浴セラピーというが、最初の訪問ではその取材で行った。

普通、石油を肌につけること自体が何か体に悪そうに思われる。話を聞いてみると、もともとはあの土地はシルクロードの一部で、砂漠をラクダが歩いていたところ、昔から地面から石油がにじみ出ている、そういう石油の水たまりのようなところをラクダが通るとラクダの足の傷が治るということを昔の人が発見したようだ。

確かに原油を塗ると細胞の再生が早まるようだ。だから皮膚の病気とか関節の病気などにはよいと言われている。実際、日本でも第1次世界大戦のときには、ドイツから輸入したということだった。石油を固めた軟こうのようなものを兵士に持たせたというのである。けがをしたらそれを塗って傷の治癒を早めていたというふうに言われていた。私は石油に浸かる治療をするクリニックがあるというので、そこに行った。これに入らずにガイドブックに書くわけにもいけないので、私も入ると言ったが、それは強くとめられた。危ないからである。いい意味でも悪い意味でも石油はすごく効果が高いので、原油浴をすると体調がすごく不安定になるそうである。だから2週間の決まった手順で治癒しなければいけないのだが、「あなたは明日帰るんだろう？ 体調が悪くなったら、石油に浸かって体調が悪くなった人を診れる医者は世界にもあまりいませんよ。だからやめておきなさい」とドクターストップがかかってしまった。

でも、それだと困る。せっかく日本から来たから何とかしてほしい、と言ったら、原油浴マッサージというのがあるからそれなら大丈夫だ、と言われた。それは何ですかと聞いたら、オイルマッサージだが、普通の良い匂いのするアロマオイルでマッサージするのではなく原油を使うというので、それにした。マッサージを受けたら、医師が危ないと言った意味がよくわかった。原油マッサージだけであるのに気分がすごく高揚するのである。何か急に元気になるのだ。だから、確かにあのようなお風呂に浸かっていたら、これは本当にどうなるのかわからないなと思った。最初に言われたことの意味がよくわかった。このときのマッサージの場面を写真に撮って案内状に載せたりもした。

旅行ガイドとは別に、当時、日経新聞で出している『日経トップリーダー』という雑誌に旅行記事を連載していたので、そこに紹介した。アゼルバイジャンの観光のことを紹介する人はあまりいないから、とても感謝された。そのこともあって、日本で観光博が開催されたときにアゼルバイジャンの観光副大臣が来ていたのが、大使館からホテルオークラに会いに来てくれと言われた。行ってみると、「旅行ガイドを出したいから、君の会社で引き受けてくれるか」と言うから、「いいですよ」と言うと、見積もりを提出するようと言われた。そこで実際に行ったときに見積もりを提出してきた。うちにだけしか見積もり依頼を出していないのかなと思ったら、後で聞くと幾つかの有名な会社にも頼んでいたようだ。先週見積もりを持っていったら、見積もりが来たのは君の会社だけだから、多分君の会社に頼むことになるというふうに言われた。その後、契約書の文案作成を行った。このような感じでアゼルバイジャンについても旅行ガイドを書くことになりそうな感じである。このように私は、いろいろなことをしている。

### 3 関西大学初等部

私は、小学校受験の幼児教室も経営している。関西大学の研究員であるから、関西大学初等部のお話をしよう。亀井克之教授の社会安全学部がある高槻ミューズキャンパスに小学校があ

る。この小学校は、今、関西で人気がある。過去5～6年の間に関関同立すべてが小学校を作ったことはご存じだろう。その中でも関西大学の小学校は人気がある。今こうして関西大学に御縁があってお世話になっているので、大変うれしく思っている。

どうして関西大学初等部は人気があるのかなと思っていたところ、ふとしたところにヒントがあった。私は、日経新聞が出している教育誌・日経『ducare』の顧問を務めているが、学校訪問シリーズという連載も持っている。その学校訪問シリーズで2012年、金沢工業大学に行った。この大学は入学するときの偏差値はそれほど高くはない。ところが4年後、就職するころになると、ほぼ100%就職できる。理系だから技術者養成であるが、そのうちの半分が大手上場企業に勤める。トヨタやホンダなどにである。

入学するときにあまり勉強ができない高校生が、どうして4年経つとこんなに立派になるのだろうと不思議であったが、訪問してみて理解できた。やはり工夫があったのだ。

実は金沢工業大学は、もともと電波学校という専門学校が改組してできた学校である。私立だからサバイバルを強く意識して学校改革を何十年にわたって行ってきた。1番の「売り」の授業が「プロジェクトデザイン」という講座である。理系の会社というのは、自動車の開発でもそうであるが、1人で行う仕事ではない。チームで行うのだ。チームでいろいろとディスカッションしながら、いろいろと決めていって、試行錯誤をしていくというのが開発であるから、この学校では、大学の1年生のときからグループでディスカッションをする方法を学ぶ。他人の意見をけなさない、人間関係で意見を左右しない、結論を出すのを人任せにしないなどのことから学ぶわけだ。また、何をテーマにして話し合うかという問題設定から学生たちが話し合っていて決める。そういう授業を1年生から4年生までみっちり行う。そうすると、さすがに、就職するときには、先輩、後輩、同僚と一緒に何か問題意識を持って、問題を設定して取り組むということにはとても慣れていて、だから、社会人として本当に即戦力の技術者になる。このような教育を4年間かけて行っている。

その「プロジェクトデザイン」という授業の教科書は、本当は公開していないのだが、「取材だから」と言って、一冊いただいていた。それを見ると、参考文献として関西大学初等部の本が挙げられていた。なぜなのか。関西大学の初等部は、見に行っていただければわかるが、物の考え方、アイデアを出すとか、話をまとめていくというような、要は社会に出てから、役に立つこと、つまりグループでほかの人と何かを一緒にするときには役立つ能力を6歳から練習しているのだ。だからとても前向きに積極的に取り組むし、人の話もよく聞いて、取り込みながら話をまとめていける、大変いい人材が育成されている。

その手法を、普通の高校生を立派な社会人の卵に育てあげるといって金沢工業大学が取り入れたのだ。この大学のオリジナル教科書のもとになったのが実は関西大学初等部のテキストで、共通の理念と手法を持っていることを発見して初めて合点がいったわけである。関西大学初等部に入学すると何かとてもいい子に育つように思う。そういうことで、私は教育関係の仕事も

行っている。

#### 4 子どもたち・孫たちの世代へのアドバイス

さて、私は47歳である。長男が先々どうしようかと思ったときに、どうアドバイスしたらよいただろうかと思ってすごく悩む。また、困ったことに、私の経歴を聞いた人や私が書いた本を読む人は、私の友達も含めて、私がいかに苦勞していないというふうになっている。何か悠々自適で、うまくしているなというふうには思わないようだ。先日もある友人から言われてショックだった。それはアヒルと同じで、水面から上の部分は動いていないけれども、下は一生懸命水かきをしているんですよと説明するのであるが、傍から見ていると、そういうふうには思われないうのである。

私の子供は私のことはもう少しよく見ているから、そんなに楽をしているとは思わないかもしれない。とにかく一生懸命しなくてはいけないし、何よりも1人ではできないから、人に好かれるということが大事だと伝えたいと思っている。何よりも困っている人には優しくしてあげなくてはだめだよというふうには言っている。子育ては小さいころも大変だが、思春期になってきた子供とかお孫さんとかをどうやって導くのかということさらには難しい。おじいちゃん、おばあちゃんの言うことはまだ聞くかもしれないが、少なくとも親の言うことを子供は全然聞かない。反発する。だから、親ができることというのと、あれこれ言うことではなく、情報を与えたり、刺激を与えたり、どこかに連れていくとか、要は環境を与えることで本人に気づかせるチャンスを与えることでしかないと思う。

私自身はある意味すごく自由には生きてきたが、それなりに苦勞して頑張っているわけである。若い人たちには、うまい話など世の中にあるわけではないのだから、一生懸命努力しなくてはだめですよと伝えたいと思う。

子どもの教育も、小学校は関西大学初等部のようなよい学校に入学できれば間違いないのであるが、それ以降については、やはり皆さん方の御経験をうまく伝えていかないといけないと思う。最近の若い男の子はやる気がないとよく言われている。大抵はうちにこもってゲームばかりをして、海外旅行すらしない。苦勞することがすでに面倒くさいと思っているようである。また、苦勞しなくても何とかかなると思っているのだろう。しかしこれからは、もう何とかかなるという風にはならない。今までは、諸先輩方が日本の高度成長を支えてきたから何とかなっていたと思う。しかし、これからはもうそんな余力はない。もう埋蔵金も尽き果て、日本には社会全体としてはもう貯金はない。だから若い人たちは、何とかかなると思っていたら、今はまだいいかもしれないが、「アリとキリギリス」のキリギリスのように冬になると死んでしまうわけである。だから、若い人は「アリ」になって、きちんと冬に備えなくてはいけない。そういう自覚を持てるかどうか心配である。女の子はすごく元気で活発で前向きで好奇心があって、

フットワーク軽くてよいのだが、男の子にはそういう人は10人に1人ぐらいしかいないように思うので、とても心配だと感じている。

以上で本稿を終える。

#### 参考文献

石井至『リスクのしくみ 第2版』東洋経済新報社、2012年。

石井至『グローバル資本主義を卒業した僕の選択』日経BP社、2012年。